

食の豊かさ 食の貧困

上田 遥著

本書は、「食の豊かさ」と「食の貧困」を社会学や倫理学の理論の枠組みから統合的に分析した力作だ。

第一部は、その着想に至る経緯が記述され、フランス社会学が「食」の社会性を捨象し、モースの贈与論やエンゲルの社会統計、ブルデューの階級論などを経

小林 富雄評

て、1979年に『食の生物文化人類学』に向けて『が

出版され「食」の社会性が具現化された。それらを踏まえ「善き食生活」を本質的に確定する方法論として「潜在能力(Capability)」アプローチを採る。

第二部は、近代の食規範の形成経緯を、グラフや写真を用いて説く。農業はもちろん、卸売市場流通や外食、集団給食、女子教育な

どの黎明期がまとめられ、戦前までの「米食型食生活」と、戦後のGHQによる支援で始まる「第二の食の近代」を示す。加えて、その副作用として食品公害、添加物問題など近代化、その反作用としての「日本型食生活」の成立へと、議論が進む。著者の問題意識の一つは、実態が把握されないまま「食」が政治化されたことであり、「層引き上げられた食規範と実態との乖離の拡大」が課題設定される。

第三部は「潜在能力」、つまり規範と実態の乖離が大きいほど「豊かさ」がなくなり「貧困」化することが定義され定量化される。

食規範の実態との乖離を分析

著者は「読み飛ばしても構わない」と一般の読者に気を使うが、その作業こそ本書最大の見せ場だ。分析方書は、食事の回数、場所、食事時間、食材品質などにかかわる評価次元を設定し、学術的な手順で誠実に実施される。「豊かさ」は、規範とされる「二汁三菜」や「共食」がいずれも3割程度の人にはしか望まれておらず、その見直しが求められる。「貧困」は、経済的貧困が欠食率などに影響を与える一方、より本質的には健康問題、長時間労働などの複数要因が複雑に絡み合っている実態が示される。それを踏まえ全国データを分析した結果、全人口の21%が「食の貧困」、40%が「善き食生活」を送っていることが示される。

本書の締めくくりに議論として、筆者は規範と実態の乖離を評価する方法はあくまでも「短期的視点」であるとする。長期的には理想を実現してもさらなる高みをめざすくらいの、克服可能な乖離の存在こそが食の豊かさの本質と著者は主張する。筆者が手の届きそうな夢に向かってゆく充実感のようなことを豊かだと言っているならば、それはおそらく正しい。

ただ、評者としては喫食者の能動的な態度がどこまで推奨され得るのかがわからない。能動性は万人に備わっているものではないし、一日三食を能動的に作り続けるのは至難の業で、行き過ぎると支配関係を誘発する。時には、飲み過ぎで羽目を外したり、調理に失敗してケンカになったり、ひどい時は食中毒で命を落したりして、規範を外れることも我々人類の食文化を育む上で重要であつたはずだ。筆者も規範を見直す「再帰的構築」を推奨するが、それを食料政策として捉えるだけでなく、介さないインフォーマルさを温存することもまた重要かもしれない。筆者の今後の研究に期待したい。

(名古屋大学出版会)

5940円

◇ うえたはるか 東京大学東洋文化研究所助教。

